

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成26年4月1日(第1239号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



協会

新年度計画・予算を審議

理事会・協議員会

秋田県建設業協会は3月26日、秋田県建設業会館別館大会議室で25年度最後の理事会・協議員会を開催した。

議事では26年度における事業計画・予算、定時総会招集のほか、▽会館改修計画(案)▽地方指定公共機関の業務計画(案)について審議が行われ、原案通り承認・可決された。

また、地方指定公共機関の業務計画(案)については、昨年、本会が同機関の指定を受けたことから、地域の防災、復旧において一層の責務を果たすため、防災業務計

画、大規模災害時行動マニュアル、国民保護業務計画それぞれの案を策定、議場に諮り承認を得た。

議事

- 第1号議案 会館改修計画(案)審議の件
- 第2号議案 平成26年度事業計画並びに収支予算(案)審議の件
- 第3号議案 定時総会招集の件
- 第4号議案 常置委員会等の変更など審議の件
- 第5号議案 指定地方公共機関の業務計画(案)審議の件

災害時、自分の命は自分で守る

講演会「生きるための道」

秋田県建設産業団体連合会は3月20日、秋田ビューホテルを会場に建設産業支援事業の一環として講演会を開催し、災害時において救助や復旧活動の前線に立つ建設業、消防関係者に東日本大震災の体験を伝え、今後にかかしていくことを目的に100名余りが聴講した。

講師を務めたのは小畑政敏氏。東日本大震災直後の宮城県南三陸町で気仙沼・本吉地域消防本部予防課長として救助活動に当たり、後に南三陸消防署長を務め、現在は南三陸町の教育委員。

講演は「生きるための道－南三陸町の記録」を演題に、震災により津波が押し寄せた当時の映像や現地の写真を交えながら講師の体験、また、地域が復旧していく模様などを紹介。講師は、海岸地域の住民が日頃の避難訓練の成果により殆ど犠牲者が出なかったことに触れ、「自分の命は自分で守るのが大前提」と述べ、被災時に自ら行動を起こすことの大切さを訴えた。一方、海岸から離れた地域においては、津波の浸水範囲が当初の想定の数倍をいく規模であったために被害が拡大したことを紹介した。



秋田・鉄路の情景

Vol.
17

「防雪柵も地産地消」

由利高原鉄道黒沢駅



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等

雪国秋田にもやっと遅い春が訪れようとしている。毎年のこととはいえ、雪には本当に難儀させられる。あれだけの大量の雪なのだから、毎年毎年苦勞させられるだけではなく資源として有効活用できればいいものだけど、人類の英知をしてもなかなか妙案が浮かばないものようである。

鉄道にとっても雪は大敵で、安全運行、定時運行のために相当な神経と費用が費やされる。秋田新幹線が吹きだまりに乗り上げて脱線した事故の記憶は新しい。JRはさっそく翌冬までに延長2kmあまりの区間に防雪柵を設置する工事を行った。車窓からの景観を損なうので痛し痒しだが、背に腹は代えられないということであったのだろう。

ところで、由利高原鉄道の黒沢駅近くで“撮り鉄”していたとき、最初は周りの農村風景にとけ込んでいて気づかなかったのだが、この写真に見える木の杭とムシロの構造物もどうやら“防雪柵”のようである。

目から鱗というか、なるほどこういうやり方があったのか。この材料であれば田舎では比較的容易に、かつ安価に手に入るとし、杭を地面に刺せばいいだけだから基礎工事も要らない。雪が解けて用が済めば杭を抜いてしまえばいいだけだから、そこが農地だとしても本来の目的で使える。見た目でもいかにも田舎の風景っぽくて好ましいのではないか。都会からの観光客にも喜んでもらえるかもしれない。

津軽地方では、地吹雪から家屋を守るための木の板を並べた「カッチョ」という簡易防雪柵があつて、それが風物詩のように位置づけられていてパンフレットやガイドブックにも載っている。してみれば、このムシロの防雪柵だって立派な観光資源だ。意識的にそれをPRすれば、来冬あたりはわざわざそれを見たいと由利鉄に乗りにくる観光客がいなくても限らない。

材料が地元で安価に入手できて、設置撤収が簡単で再利用できて、コンクリートを使わないから環境にも優しいし、おまけに風物詩として観光資源にもなりうるとしたら、これはもう、いいことづくめではないか。

ミステリアスな山の民

藤原優太郎

「山かげは山伏村のひとかまえ」

芭蕉が近江甲賀(滋賀県)の山伏村で詠んだ一句である。山伏は一定の住いをもたない漂泊者とされ、伊賀と甲賀の山岳武士団にも当てはまり、のちにどちらにも影の民、忍びの集団として知られるようになる。

伝説、あるいは史実にしろ、人煙まれな山奥に潜み、山中で暮らしを立てた者たちは全国各地に隠れ山民として存在していた。それは獵師マタギであったり、椀物を作る木地師であったり、鷹匠、忍び、修行僧、遊芸人であったりした。いずれにしても一定の社会の枠から外れ、隔絶された世界をその行動の範疇とした。

以前、自著『秋田の峠歩き』に「マタギのルーツを探る」と題したコラムを書いたことがある。その中で、高橋文太郎の『秋田マタギ資料』の中から、マタギの里、根子について次のように引用させていただいたことがある。

「開村当時は武士の流浪人として狩人(又鬼)

となり、鳥獣を捕えて食料に充てていたが、佐竹藩主より狩人を命じられ熊の胆は当時の御製薬所に上納し、傍ら開墾に励み、村の人口も増えた。副業として熊の胆や薬草など薬の販路を多領に求めて行商に出た」。熊の胆を主とした薬商いの行商の旅は樺太、北海道を始め、東北一円、関東、中部方面へ拡大したという。

阿仁の根子などに見られる非平地民の狩人はどのようなルーツの人たちなのだろうかと思いをめぐらした。東北、越後の山奥で生きのびたマタギといわれた人たちは、もしかして裏社会に暗躍した忍びの集団ではなかったかというのが自分の推論である。そこから話を進めてみたい。

マタギが狩りをする時の唱え言葉は、真言の呪文に通じ山伏修行にもつながる。たとえば、「こっちは

シゲノの累、ブンブ気ままに暮らす、ナムアブラケンウンソワカ」という呪文がある。マタギの流儀には、小玉流、滋野(シゲノ)流、青葉流などいろいろあったが、根子マタギは滋野流といい、日光赤城明神からの免許を得て越後の三面、信州の飯田など各地に散ったものと思われる。

唱え言葉にある「滋野の累」であるが、信州小県(ちいさがた)郡に一定の勢力を持った滋野一族は根井(ねのい)系統であり、秋田県矢島地方にもゆかりを持った。もともと滋野氏は朝鮮百済王の末裔といわれ、のちに海野、望月、真田の三家に分かれる。その海野家の末が「忍者舞台」で知られる真田一族となる。

ほかに代々、神官系といわれる禰津家は鷹匠の元締めとなり、望月家は武田信玄が抱えた「用間(よう

げん)」という間諜(忍び)の中核となった。まさに滋野の係累は地下組織のキー局のような存在であった。戦国時代、このような裏組織の母体となった透破(すっぱ)などは中忍という山の民であった。忍者といえば甲賀者や伊賀者が有名であるが、大名が抱えた忍びの者としては、北条氏



マタギ免許状

の乱破(らっぱ)や越後(上杉氏)の担猿(のきざる)、近江の志能便(しのび)などがあるが、上杉系の越後担猿は生薬を作って売り歩き、のちに富山の薬商人となって現代に受け継がれている。

俗に影の者といわれたこうした山の民は、真言密教から派生した山伏集団で、山岳宗教をよりどころ、あるいは隠れ蓑にして諸国の山々を渡り歩いた。

今ここで述べる余裕はないが、近江小椋庄発祥とされる木地師集団にしても、平地社会とはまったく異なる山の暮らしの知恵を身につけていた。いずれにしても、マタギが日光赤城明神、木地師が惟喬(これたか)親王(清和天皇の兄)貴種ゆかりの伝承を有することは、山の民なりの生きのびる知恵があったことは間違いなく、これらが今の自分の研究テーマである。